株式会社アイパートナー　i・PARTNER　第 45 号

愚直経営通信

皆様の周りにこの通信が役立ちそうな方がいらっしゃればご紹介頂ければ幸いです。

２０１８年１月

今年のテーマ 「柔弱剛強」

目　次

1．柔軟性を取り戻す
2．老子の教えでリセット
3．柔軟性とやり抜く力
4．2017 年の取組み実績
5．５年目の大吟醸酒づくり
6．「２度目の台湾の旅」

柔軟性を取り戻す

新しい年をスタートするにあたり、今大事なことについて考えてみました。

テーマは「柔弱剛強」です。柔らかくて弱いものは、頑丈で強い物に勝つことができる。つまり、柔軟性こそが大切であると。なぜこのテーマかというと、最近「柔軟性」の大切さを痛感することが増えているからです。

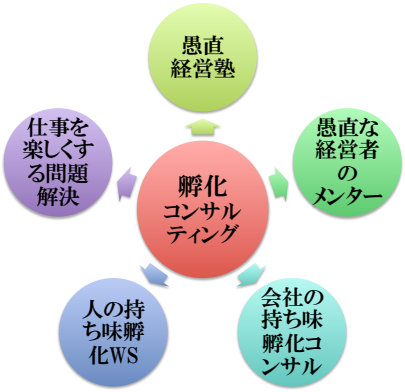
まずは、自分の身体、筋肉に関節、そして血管の柔軟性です。予てより体が固かったのですが、年齢のせいもあり健康にも影響を与える心配が出てきました。身体の柔軟性は思考の柔軟性にも繋がるということで、強い危機感を感じています。

次は働き方の柔軟性です。同世代の人は、役職定年に早期退職と、これまでの働き方との決別を迫られ、新たなステップを踏み出す必要性があります。新しい環境に対応する柔軟性は、年齢に関係無く、転職が当たり前の世代の若者にとっても大切なテーマです。

そして組織の柔軟性です。世界的に見ても日本人の生産性の低さが指摘されています。これまで当たり前とされてきた組織の慣習の見直し待ったなしです。例えば、苦痛に満ちた満員電車での通勤、その背景にある労働時間で縛る働き方。生産性とモチベーションを下げるマンネリ会議。大手企業の長年繰り返されてきた組織ぐるみの不正にみる組織の硬直化など。

人と組織の活力を取り戻すために、経営と社員一人ひとりの柔軟性が問われます。

人口減や AI などの新テクノロジーによる環境変化の中、ダーウィンの進化論の如く、規模や頑強さではなく、本当の柔軟性が問われる時代になって来たのではないでしょうか。



【 ミッション 】

愚直な経営者と夢と悩みを共有し、会社と人の持ち味を孵化させる。

発行人　三村邦久

老子の教えでリセット

「真の強さとは」

私が師事している田口佳史先生は東洋思想（中国古典）をベースにして、強さについて以下のように説いておられます。

『ほんとうに強いということは、他人に勝つことではなく、自分に勝つこと。これを「克己」という。最も手強い敵は自分だから。
王陽明も「山中の敵を破るは易し。心中の敵を破るは難し。」といっている。
真に強者になろうと思ったら「克己」、自分に克って自分の気持を自由自在に動かせる人間になる。また、ほんとうに強いのは「柔弱」であって「剛強」でない。これは鉄板の強さよりも柳の強さの方が強い。
「柔弱は剛強に勝る」
何故柳の方が強いかといえば「いなす、かわす」で真面（まとも）に打ち合わないからです。相手の力が分散してしまい、力が入らない状態になってしまうから。
もう一つ、柳が勝つのは「復元力」だ。
しばらくすると、まるで何も無かったように元通りになっている。
こういう人間が一番強い人なのである』と。

ここで、発想の転換を助けてくる老子の思想をご紹介したいと思います。

柔弱剛強

強さを求めると強大で堅固になる。行き過ぎた堅固さは硬直化を招き老化に繋がります。一方、柔軟性や弱さは若さの証明であり、未来を切り拓く力になる。

将（まさ）にこれを歙（ちぢ）めんと欲すれば、必ず固（しばら）くこれを張れ。将にこれを弱めんと欲すれば、必ず固くこれを強くせよ。将にこれを廃（はい）せんと欲すれば、必ず固くこれを興せ。将にこれを奪わんと欲すれば、必ず固くこれに与えよ。これを微明（びめい）と謂（い）う。柔弱（じゅうじゃく）は剛強（ごうきょう）に勝つ。魚は淵（ふち）より脱すべからず。国の利器（りき）は、以（も）って人に示すべからず。

現代語訳すると、
何かを縮小させようと思うならば、まずそれをいっぱいに拡大させると良い。何かを弱めようと思うならば、まずそれを強くさせると良い。何かを衰退させようと思うならば、まずそれを繁栄させると良い。何かを奪おうと思うならば、まず何かを与えると良い。このような事をわずかに見える明知と呼ぶ。
柔よく剛を制すというのはこの事である。魚は水底にいてこそ安全なのだ。この様な国を治めるのに役立つ事柄は簡単に人に明かすべきではない。

上善如水

有名な一節。水は生命の源。変幻自在、どんな隙間に滲み込む柔軟性と岩をも砕く大きな破壊力を持っている。

上善（じょうぜん）は水の若（ごと）し。水は善（よ）く万物を利して而（しか）も争わず、衆人（しゅうじん）の悪（にく）む所に処（お）る。故（ゆえ）に道に幾（ちか）し。居（きょ）には地が善く、心には淵（えん）が善く、与（まじわり）には仁が善く、言には信が善く、正（政）には治が善く、事には能が善く、動には時が善し。それ唯（た）だ争わず、故に尤（とが）め無し。

現代語訳すると
最上の善とはたとえば水の様なものである。水は万物に恵みを与えながら万物と争わず、自然と低い場所に集まる。その有り様は「道」に近いものだ。
住居は地面の上が善く、心は奥深いのが善く、人付き合いは情け深いのが善く、言葉には信義があるのが善く、政治は治まるのが善く、事業は能率が高いのが善く、行動は時節に適っているのが善い。
水の様に争わないでおれば、間違いなど起こらないものだ 。

無為自然

知識は大切であるが、知識に固執すると知識が目的化し、作為的で却って物事がうまくいかない。自然の流れや力を活かすことが大切。

学を為（な）せば日々に益（ま）し、道を為せば日々に損（そん）す。これを損して又（ま）た損し、以（も）って無為（むい）に至る。無為にして為さざるは無し。天下を取るは、常に無事を以ってす。その事有るに及びては、以って天下を取るに足らず。

現代語訳すると、
学問を修めると日に日に知識が増えるが、「道」を修めると日に日に知識が失われていく。知識を減らした上にまた減らし、そうして無為の境地へと至るのだ。無為であれば出来ない事などありはしない。世界を支配するには、ありのままにまかせて余計な事はしない事だ。自分の思い通りにしようとして余計な事をすれば、世界を支配する事など出来はしない。

純朴が一番

人は完成を目指すが、完成は可能性を失うこと。赤子のような柔軟性と好奇心を持って、多様性を受け入れる。多様性は創造性に繋がり、そこから未来が見えてくる。ここがダイバシティの本質である。

その雄を知りて、その雌を守れば、天下の谿（けい）と為（な）る。天下の谿と為れば、常の徳は離れず、嬰児（えいじ）に復帰す。その白を知りて、その黒を守れば、天下の式（のり）と為る。天下の式と為れば、常の徳は忒（たが）わず、無極に復帰す。その栄を知りて、その辱を守れば、天下の谷と為る。天下の谷と為れば、常の徳は乃（すなわ）ち足りて、樸（ぼく）に復帰す。樸散（さん）ずれば則（すなわ）ち器となる。聖人はこれを用いて、則ち官の長となす。故（ゆえ）に大制（たいせい）は割（さ）かず。
現代語訳すると、
男性的な美点を知って女性的な立場を保つ様にすれば、全てを受け入れる谷間になれる。全てを受け入れる谷間になれば、真実の徳から離れる事なく赤ん坊の様な安らぎを得られるだろう。秩序の整った善性を知って混沌とした悪性をも包容すれば、万物の模範となれる。万物の模範となれば、真実の徳に反することなく善も悪も超えた境地に至る事が出来るだろう。輝かしい栄光を知ってドン底の屈辱を忘れずにいれば、全てが集まる谷川になれる。全てが集まる谷川になれば、真実の徳で心が満ち溢れて切り出したばかりの丸太の様な純朴さに帰る事が出来るだろう。その丸太を細かく切り分ければ、様々な用途に用いる事が出来る。「道」を知った聖人はその様な人材を上手く使って人々の上に立たせる。だがそれら人の上に立つ人々のさらに上に立つ様な人となると、丸太の様な純朴さを保ったままの人が良いのだ。

知足者富

欲は大きなエネルギーになるが、地位や権力にお金、物的欲望の呪縛に囚われる危険性がる。少私寡欲であることで、何者にも囚われない柔軟性が得られる。

人を知る者は智、自ら知る者は明（めい）なり。人に勝つ者は力有り、自ら勝つ者は強し。足るを知る者は富み、強（つと）めて行なう者は志有り。その所を失わざる者は久し。死して而（しか）も亡びざる者は寿（いのちなが）し。

現代語訳 すると、
他人を理解する事は普通の知恵のはたらきであるが、自分自身を理解する事はさらに優れた明らかな知恵のはたらきである。他人に勝つには力が必要だが、自分自身に勝つには本当の強さが必要だ。
満足する事を知っている人間が本当に豊かな人間で、努力を続ける人間はそれだけで既に目的を果たしている。自分本来のあり方を忘れないのが長続きをするコツである。死にとらわれず、「道」に沿ってありのままの自分を受け入れる事が本当の長生きである。

柔軟性とやり抜く力

窮すれば変ず、変ずれば通ず

柔軟性を取り戻すということは言い換えると、過去や世間に囚われず変わる勇気を持つということではないでしょうか。

では、どうずれば変わる勇気、覚悟が持てるのでしょうか。

易経に「窮すれば即ち変ず、変ずれば即ち通ず」という言葉があります。人間は行き詰まってどうにもならなくなると変わらざるを得なくなる。そして何かが変わると自ずと道は開けてくるという意味です。

それは、人生を大きく揺るがす重大な出来事に遭遇するところから始まります。例えば、４０歳を過ぎてマラソンを始める人がいますが、走るきっかけは何かと聞くと、「生活習慣病で、医師に余命を宣告された」と答える人がいます。今のままでは自分と家族の日常が失われてしまうという危機に直面したことが変わるエネルギーになったのです。

捨てる勇気

危機的状況を理解し覚悟を決めると、次はこれまでの自分を捨てることです。人がどう評価しようが、収入が減ろうが、それを受け入れる覚悟があるかどうか。捨てるということは、持っていたものを失うのですから、当然、急降下します。どん底まで落ちていくような恐怖を感じることもあるでしょう。

しかし、それまで囚われていたものを捨てることで、本来の自分が浮き上がってきます。

持ち味を活かし未来を展望する

捨てたあとに残った大事なもの。それをベースにして新たな展望を描いていきます。大事なものとは、本来の自分。つまり、もともと持っている持ち味やＤＮＡ、個性です。自分の価値観や持ち味を軸に新しいものをくっつけて形づくり、世の中に貢献できる場所を見つけていく。そのために学んだり、これまでのものを組み直したり、そこからまた新たなものを足していったりということを繰り返しながら、自分という人間を分厚くしていくのです。

やり抜く力

三日坊主が大敵。どんないいことでも持続的に実践できなければ意味がありません。そのためにも、繰り返し、繰り返し、骨の髄まで刷り込んでいき、最後までやり抜く力が必要です。

やり抜く力の源泉はと考えると以下の要素があるのでは考えます。

①得意、好き、楽しいこと

②向上心、上達、成長がる

③人の為に、人への感謝

④一緒に頑張る仲間がいる

⑤未来への希望、夢、憧れがある

⑥人生の目標、絶対に譲れないものがある

※上記の６項目は常に自問自答せねばなりません。

根拠ある自信を持つ！

柔軟性、変わる勇気の根っ子には、自信があるのだと思います。では、自信はどこから来るのかというと以下の要素に集約されるとおもいます。

１）小さな成功体験の積み上げ

２）計画性と準備、鍛錬

３）失敗からの学び、教訓

４）正しいことをやっている自覚、信念

５）志があれば応援団ができる

根拠のない自信が大切だという人がいますが、そう思えない心配性の人も多いわけで、しっかりとした自信の裏付けを持ちたいものです。

２０１７年の取組み実績

◆本当に大切なこと

これまで約３０年に渡り、経営コンサルタントとして様々な取り組みをしてきました。「戦略や方針づくり」「業務システム、経営管理や人事評価など組織運営システムづくり」、そして「スキルアップ研修」など。

しかし、どんな立派な戦略やシステムを作ろうと、どれだけ知識やスキルがあろうと、大切なことは社員一人ひとりの心の中にある。つまり、社員がモチベーション高く、誇りをもって働かなければならない。そして、一人ひとりが持ち味を発揮し、いい働き方を通じて、いい人生を送ることに繋がらないと何の意味もないと感じるようになりました。

加えて、内容と時間、アウトプット、費用が分かり易すいことが大切であると。

そこからこの１年は「持ち味を活かす」という基本思想に、経営コンサルティングの視点を加味し、研修やワークショップというスタイルで活動をしてきました。

◆ 基本コンセプト

「持ち味を開花させて、
豊かな働き方と人生を切り拓く」

※　社名「アイパートナー」の”I”はインキュベーション(孵化・開花)の意味

◆2017年取り組み実績

1)事業支援

「中国事業立上げサポート　5年目」

「事業転換」事業計画づくり

2)組織コンサルティング

「 企業文化の変革」

会社・働き方、人材のビジョンづくりと浸透

「人材育成システム」づくり

「働き方改革指針」づくり

「会社と人のブランディング 」

3)コーチング

「社長コーチング」 会社の成長、組織問題解決

「中堅社員コーチング」

持ち味を活かしてステップアップ！

「新人指導担当者コーチング」

新人指導における問題解決

4)持ち味ワークショップ

「ダイバシティと持ち味」WS

「持ち味を活かす　キャリア・アップ 」WS

「持ち味ファシリテーター」養成講座

5)階層別研修

「経営幹部研修」　戦略と組織

「幹部候補者研修」　リーダーの人間的魅力

「管理職研修」

トヨタに学ぶ創業の精神と企業文化

「監督職研修」

使命と役割、リーダーシップ、問題解決力

「新人研修」

楽しく働く、人間的と能力的成長

「中堅者社員向けロジカルシンキング研修」

明確さは力なり、人を動かす力を高める

6)その他

「新人育成担当者研修」

人を育て自分も成長する

「安全管理者研修」

仕事を楽しむ、イキイキ働くために

2018年も頑張ります！

「５年目の大吟醸酒づくり」

オリジナル大吟醸

今年で５年目となるオリジナル大吟醸の仕込、12 月 10 日（日）に愛知の関谷醸造「ほうらいせん吟醸工房」で行なってきました。

（この酒蔵は「空」という銘柄の大吟醸で有名です）

この酒は、私の故郷である兵庫県多可郡多可町中区は山田錦誕生の地、父が残した田圃で収穫した山田錦特等米 100％でつくる完全オーダーメード大吟醸です。あの獺祭にも引けを取らないと評価をいただいております。

味付けの仕様は、

「純米大吟醸（精米歩合 50%）、原酒（添加なし）、味の甘辛：辛口、香り：穏やか」です。

酒造りのプロセス

杜氏さんから精米・発酵や味付けのしくみなど、お酒ができる過程のレクチャーを受けました。

1）精米　約50時間かけて、精米度合50％まで削る

2）酒米による米麹づくり

3）酒母づくり（アルコールをつくる酵母の培養）

3）発酵・醪（もろみ）づくり・・・3段仕込

1日目（添仕込）

2日目　（踊）・・・1日休憩

3日目（仲仕込）

4回目（留仕込）

4）搾りで酒と酒粕の分離　・・・搾りたてのワイルドな生酒が誕生

5）酒から酵母を除去して瓶詰・・味の整った生酒が誕生

6）65度で熱処理して貯蔵　・・・古酒にもなる貯蔵用の酒が誕生

3段仕込みという製法は、江戸時代に確立され、基本形は今も変わらないそうです。

百姓の倅

1961 年、山田錦農家の息子として生まれた私は、幼少期から堆肥を作るための牛の世話、泥田での田植え、汗まみれになりながらの肥料や農薬の散布、稲刈り・脱穀に精米、等級検査・出荷と３０歳まで父を手伝ってきました。

そんな経験から、冬に土地を肥やし、春に種を蒔いて、秋に収穫する。無理に急がず、四季の変化を感じながら、自然の秩序中で生活するのは当たり前のことだと思っています。日照り、長雨、いもち病に台風襲来と自然の前では人間は無力です。肥料や農薬に農機具の支払いを考えれば、忍耐ばかりで実入りも悪く、決して良い商売とは言えません。

そんな農業ですが、私を育ててくれた故郷のために何か出来ないかと考え、実家の田圃で穫れた山田錦でお酒を作る試みをしています。

米を作って終わりではなく、酒蔵の杜氏さんからお酒を飲む人までの線を作り、米作りを担ってくれる人にやり甲斐や誇りを持って貰えないかと考えています。

「収穫を問うなかれ、ただ耕耘（こううん）を問え」。

この言葉は私の座右の銘で、「安直に実りを求めず、田を耕し種を撒くこと一心に力を注げ」という意味です。

「２度目の台湾」

台湾の歴史

中国には仕事で頻繁に行っていますが、台湾は２度目です。それも２度とも観光です。

親日的な国である台湾、かつては「フォルモサ」（ポルトガル語：Formosa，「麗しの島」）として知られた台湾島は、漢民族が同島に移住し始めた 17 世紀における大航海時代のオランダ及びスペインの植民まで、台湾原住民が主に居住していました。

1895 年に日清戦争の結果下関条約にて台湾が日本に割譲されるまでは、台湾の居住者の大多数は漢民族あるいは漢民族に同化された台湾原住民でした。現在の DNA の調査によれば、8 割が南方アジア系とのことです。

1912 年、中華民国が中国に設立され、1945 年における日本の降伏後、中華民国は台湾の統治を引き継ぎました。国共内戦後、中国共産党は中国大陸を完全に支配。1949 年には中華人民共和国を設立し、蒋介石率いる中華民国は政府を台湾へと移転しました。

右の写真は、中正紀念堂の外観と中に祀られている蒋介石像。その背後の壁には、建国の理念「倫理・民主・科学」と書かれています。

20 世紀後半に台湾は急速な経済成長及び工業化を経験し、現在では先進国です。1980 年代及び 1990 年代初頭、普通選挙で複数政党制民主主義に発達しました。世界第 20 位ほどの経済規模を有し、世界経済においてハイテク産業は重要な役割を担っています。台湾は言論の自由、報道の自由、医療、公教育、経済的自由、男女平等、人間開発の観点から上位に順位付けされています。

今年４月に中国の西安に旅し、蒋介石が張学良に監禁される西安事件のあった場所を訪れており、中国と台湾の歴史に触れると一年となりました。

（西安事件とは、１９３６年１２月、東北軍の張学良が、国民党の蒋介石を西安で監禁し、国共内戦の停止を迫り、それに同意させたクーデター。抗日民族統一戦線を結成する端緒となり、１９３７年の日中戦争の開始と共に第２次国共合作が成立する。）

故宮博物院

故宮博物院は、1924 年に北洋軍閥の一人である馮玉祥が溥儀を紫禁城から退去させ、1925 年 10 月 10 日に宮殿内で清朝が持っていた美術品などを一般公開したのが始まり。その後、満州に駐留していた日本軍が華北地方に軍を派遣してきたため、蒋介石の国民政府（1948 年からは中華民国政府）は博物院の所蔵品を戦火や日本軍から守るべく重要文物を南方（上海と南京）へ疎開させました。

第二次世界大戦後、1948 年の秋より中華民国政府は故宮博物院から第一級の所蔵品を精選し、台湾に運び出されました。したがって故宮博物院の所蔵品は北京と台北の 2 カ所に別れて展示されています。

中でも、翡翠白菜と肉形石が有名です。

翠玉白菜の大きさは手のひらよりやや大きいぐらいである。上部の緑色で白菜の色を再現しているが、これは人工着色ではなく、石に元から付いていた色を生かしたもので、葉の上にはバッタとキリギリスが彫刻されており、これは多産の象徴と考えられています。

肉形石（にくがたいし）。素材は玉髄類の碧玉で、石が形成される過程でいくつもの層が重なり色合いのある縞模様が生まれました。自然原石のままの肉部分と無数の穴を開け染色された上部の皮部分との自然と人工の絶妙な組み合わせが見事です。

夜の九份

ここは、宮崎駿のアニメ『千と千尋の神隠し』のモデルになったという噂もあり、日本の観光客への知名度が高まったほか台湾でも知られ「湯婆婆の屋敷」の看板がモデルとされる茶屋のそばに掲げられています。一方、ジブリ・宮崎監督によりこれは公式に否定されているそうです。

その昔、九份は台湾の一寒村に過ぎなかったが、19世紀末に金の採掘が開始されたことに伴い徐々に町が発展し、日本統治時代にその最盛期を迎えた。九份の街並みは、日本統治時代の面影を色濃くとどめており、路地や石段は当時に造られたものであり、酒家（料理店）などの建物が多数残されています。

十份の天燈あげ

元宵節の日（春節から数えて 15 日目で最初の満月の日。旧暦のお正月の締めくくりの日）、十分では平渓天燈節が毎年開催されています。

お祭りでは、願い事を書いた 1000 個以上のランタンを一斉に夜空に放つそうです。

その体験ができるということで、荒天の中、ランタンを上げました。赤いランランタンに、願い事を書くのですが、私は表に「知足者富」裏に「商売繁盛」と書きました。ご利益があればいいのですが。（笑）

パワースポット龍山寺

1738 年、福建省泉州から渡来した人々により、福建晋江安海龍山寺の分霊として創建された台北市内で最古の寺院。

本尊は観世音菩薩であるが、現在では道教や儒教など様々な宗教と習合しており、孔子や関帝（関羽、三国志で知られる）、媽祖など、祀られている神は大小合わせて 100 以上に及ぶ。人々は様々な神が祀られた 7 つの香炉を順に廻りながら、それぞれの神に参拝します。

世界三大小龍包

鼎泰豊（ディンタイフォン）は、日本でも有名な小籠包が看板料理の上海料理チェーン。1958 年、中国山西省出身の楊秉彝（ヤン・ピンイー）によって、中華民国台北市大安区信義路 2 段（永康街）に第 1 号店が開かれた。鼎泰豐は、食用油を販売する油問屋として開業。小籠包の販売は、本業の食用油の売り上げが落ち込んだ時期に、副業として開始された。昔はよくもっと風情があったそうです。

少し残念！

株式会社アイパートナー

代表取締役　三村邦久　mimura@i-partner.co.jp

会社電話：045-477-2312　FAX:045-477-2324　会社 HP：http://www.i-partner.co.jp/

無断転載はご遠慮ください。